38

平成15年4月8日

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ（三三）

第五三則　黄檗噇糟

〔示　衆〕

衆に示して云く、機に臨んで仏を見ず、大悟に師を存せず、乾坤を定むる剣に人情没く、虎兕を擒うる機に聖解を忘ず。且らく道え、是れ甚麼人の作略ぞ。

〔本　則〕

挙す、黄檗、衆に示して云く、汝等諸人は尽く是れ噇酒糟の漢なり〔黄檗門下のみ〕。与麼に行脚せば、何処にか今日あらん〔今は既に昔に如かず、後は当に今に如かざるべし〕。還た大唐国裏に禅師なきを知るや〔眼、四海に高し〕。時に有る僧、出でて云く、只如、諸方にて徒を匡し衆を領ずるは又た作麼生〔黄檗は身を兼ねて在り〕。檗云く、禅なしとは道わず、只是、師なし〔且らく一半を救い得たり〕。

『従容録』百則の中で、黄檗がテーマとなっている則は後にも先にもこの第五三則だけです。この人は黄檗希運（＊～八五六？）といわれる晩唐の禅匠ですが、かの百丈さんの法嗣であり臨済の本師という、たいへん重要な地位にあります。福建省の省都である福州で生まれ、州の黄檗山で出家しました。後に明代の隠元禅師がここに住持し、日本に渡来して京都宇治に黄檗山万福寺を建てて黄檗宗の開山となりますが、その名称はみな福州黄檗山に由来します。

さて、希運は江西省の百丈さんのもとで修行し、その法を嗣いで省の西北にある高安県の山に道場を開き、ここもまた黄檗山と名づけます。宰相の裴休から大きな帰依を受け、説法を記録した『伝心法要』一巻が編集されました。今日伝存するこの語録は、数ある唐代の禅録の中でも内容のすばらしさでは第一級の名著とされています。この人には一千人の弟子がいたと伝えられ、唐代の禅匠たちと同様、道場の山名「黄檗」の名で呼ばれ、広く親しまれています。

道元禅師も黄檗を深く敬慕し、『正法眼蔵』の各所でとりあげていますが、特に行持の巻上では黄檗が若き宣宗を二度も平手打ちした因縁を、『碧巌録』第一一則の「黄檗噇酒糟漢」という同じ則の説明部分から引いているのが注目されます。『従容録』にはこの因縁はみられません。

それでは〔示衆〕。いうまでもなく、この一則に対する万松さんの宗旨宣揚です。意訳します。

「すばらしい禅の働きの時は自然に仏と一つになっているし、悟りの時も先生の指導を超えている。天地を定めるほどの智慧は断固として人情ヌキだし、トラやサイを生捕る命がけの活動には悟りもヘチマもありはせん。こんな腕を振える者は誰かな。」

原文は二句づつの対句で、すばらしい禅の働きや天地を定める智慧とは、黄檗の指導手段の並はずれてすぐれたさま。指導を超えた悟りや命がけの活動とは、黄檗の指導によって打出される本モノの弟子の立場をのべているのです。万松はこうした理想的な道場の風光が禅修行の眼目なんだ、黄檗こそこんな手段が振える者だ、と賞讃しています。

つぎに〔本則〕の意訳です。

黄檗が雲水たちに教え示した。

「お前らはまったく、酒カスばかり食らっている奴だな。そんな風で行脚修行しておったんでは、いつになっても悟れんぞ。わが大唐国内には禅師らしい者など一人も居やせんワイ。」一人の僧が進み出た。「先生、それでも現にそちこちの道場で雲水を指導している方がいますが。」

福清県の黄檗山全景

黄檗「ワシは禅がないなどといってないぞ、ただそれを教えてくれる本モノがないといっただけじゃ。」

いや、黄檗の言葉の豪放ですさまじいこと。「噇酒糟の漢」とは酒カスばかり食らっている奴、つまり本モノの美酒を飲んでいないという意味。また「大唐国裏に禅師なし」など、よくも喝破したりの豪語ですね。だいたい、黄檗は身長七尺だったといわれ、つまり二mを超す大男で、若い時からずばぬけたおうようさと、時流を見下す気概があったそうです。だからこそ、現におのれの道場で修行に励む雲水たちに向かい、こんな雷を時々落せたのでしょう。雲水にとっては、コワイ先生でした。

ところで、ここで黄檗が云いたかったのは修行のあり方。いくら精励しても量ではなく質だ、という中味についての厳しい指摘でした。万松が「噇酒糟の漢」に対して「昔に比べて今はダメ、この先もっとダメになるだろう」というコメントは、黄檗の意を鋭く突いています。諸方の道場で一匹オオカミたちが指導の剣を振い、雲水も必死に行脚修行につとめていた唐代にして、黄檗はなお常に向上を目ざしていたのです。

それにしても「大唐国裏に禅師なし」はスゴい言葉。万松のコメントは「このくらい高い見識がなくては禅師とはいえぬ」と、大きな讃辞を贈っています。ですから、さきにふれた黄檗が宣宗を打ったというのも、いかにも粗暴のようですが、日常生活の中で不断の新たな真理に生きようとする者の迫力と受けとるべきでありましょう。後に宣宗が則位して崇仏に復帰させ、黄檗に断際禅師の師号を諡しているのもむべなるかなです。

黄檗が豊かな人間性を秘めていたことは、出家時に盲目となった母を欺いて出家した罪を悔い、母の死に涙して松明を三度廻し、「一子出家すれば九族天に生ず」と唱えて川に投じ懇ろに供養したことからも明らかです。今なお禅門で葬儀に松明を廻すのは、このゆかしい故事に由来。黄檗はコワイ中に慈愛を湛えた偉丈夫でした。

私はこれまでコワかった人が三名。学道の上で沢木興道老師と本師。生活の上では叔父でした。沢木老師からの警咳は坐禅指導を含めて一、二年にすぎませんが、いつもリンとした威神力に圧倒される思い。本師と叔父は共に九五歳の長寿を保ったので、一〇代で両親と別れた私にとっては親代りの恩師。本師は私を「お前さん」と呼び、曲がったことには大声で叱責をくだし、「お前」と呼ぶ叔父はいつもズバリと言動を指摘してくれました。しかし、両者とも深い思いやりをもって私を支えてくださった。私の今日あるのは、間違いなくこうしたコワイ方々のお陰であります。

してみると、コワイ方々が身近にいるのは、とてもすばらしいことなのですね。黄檗の弟子一千人は、そのコワさを求めて集まったのではないでしょうか。残念ながら、私は至ってやさしい人間です。

第二〇回 成道会

―伊藤幸一さんの出家得度式―

一二月八日・龍泉院

成道会は、お釈迦様が悟られた日を讃える重要な行事です。今回は、伊藤幸一さんの出家得度式が併せて行われました。

報恩坐禅のあと、梅花講の皆さんの奉詠に始まり、参禅会員配役による成道会が粛々と進行。続いて、伊藤幸一さんの出家得度式があり、伊藤さんのご家族、親族のご列席をいただき、厳粛な儀式に梅花講員の皆様とたくさんの道友が立ち会いました。

白装束姿の伊藤さんは、椎名老師より安名（あんみょう）・幸道を授与され、坐具、衣鉢を頂きました。真新しい法衣に身を包んだ姿は、清々しさにあふれ、参列者に深い感銘を与えました。

ご家族を交えての座談の席では、白装束姿に目頭を熱くしたという感想を始め、大勢の方から感動の声と激励の言葉が寄せられました。

点心には多くの方々より添菜、また、お祝いをたくさん頂戴しました。二〇回目の成道会は、素晴らしい諸縁を結び大円成しました。

「我を成す者は朋友」

堂頭　椎名　宏雄

百丈禅師の言葉である。時は九世紀の初め。肉の兄弟である道吾と雲巌の修行時代、兄は薬山にあって、弟は百丈のもとで、それぞれ修行に励んでいたが、先に悟りをえた兄は、弟宛にぜひ薬山に来るようにとの手紙を届ける。これを読み、百丈の師恩を思い当惑している雲巌に対し、百丈は「我を生む者は父母、我を成（な）す者は朋友」と述べて雲巌を薬山のもとに遣り、ついにその法を嗣がせる。道吾の弟を思う法愛と、百丈という人間の大きさを遺憾なく伝える禅門の佳話である。

もともと「朋」は師を同じくする者、「友」は志を同じくする者を意味し、相手の悲しみを我が悲しみとする堅い交りが朋友なのである。禅門では、師も弟子も共に道の仲間とする伝統がある。先生と学人、古参と新到の区分はあっても所詮は道友であり、共に切磋琢磨し合う。こうした関係は、乳水のごとくあれと教える。むろん、年齢・性別・職業をこえて。

わが禅会の結束もまた、原点はそこにある。専門道場とて同じこと。我が父母からは身体をいただき、常識を授かるが、人間として最も深い道の歩みは、志を同じくする朋友の力による。たしかに、小さなおのれを鼓舞し柑槌してくれるのは朋友の力である。それはかえって親友ほど気づかずにいるが、無意識のうちに実は互いに大きな感化を及ぼし合っている。すでに物故されたわが禅会の偉大な先輩を思うにつけても、それはまぎれもない事実である。いったい、道の朋友は前世からの深い法縁によるのであって、今生だけの薄縁では断じてない。

さきに佐藤友則氏、此度は伊藤幸道君、当山禅会にあった二名の出家者が、奇しくも時を同じくして専門道場に掛搭（かとう）する。時は天地風光の輝く春、片や北陸、片や四国と方向は違えど、共に果しなき修道の旅であり、そこではまた新たな朋友に邂逅し、互いに無瑕の明珠を磨き合うにちがいない。

しかし、両者がたといどんな道を歩もうとも、この禅会で出合った朋友、特に幸道君の得度式に共に随喜し共に持戒を誓い合った大勢の朋友たちの心を、けっして忘れることはないであろう。こんなすばらしき道の朋友各位と共に、両者の法身堅固、弁道増進をただひとえに祈念してやまない。合掌

仏道の相続

―幸道上座の誕生を慶ぶ―

松戸市　小畑　節朗

在家と出家者との相違は、仏道の相続のあり方にあるのではないでしょうか。

大乗仏教の標榜する処は「上に菩提を求め、下に衆生を化す」という菩薩行を実践することを僧俗に求めているのであります。私にあっては「上求菩提」では入口に立つ程度で、「下化衆生」においては道遠しの感があります。（自身の反省を込めて）本来ならば在家でも日々の生活に仏法が「行」によってこの二つの道が具現されてなければならないのでしょうが、両立はなかなか難しい。

出家するということは世の柵を薄くして、特に「下化衆生」の道を行じるともいえます。

しかもその行じる処の仏道を次世代の人々に伝えてゆく大仕事があります。大慈悲心の発露であり、仏道の相続であります。

今度、会員の伊藤幸一さんが出家得度されて「幸道上座」になられ、三月には永平寺に安居上山されることとなりました。

当参禅会は発足以来三十二年、椎名老師が大慈悲心を持って継続され、今日出家得度者が出たことは故なしとはいえません。何故ならば三二年耕やし、時節因縁の熟する処、諸仏諸祖の冥助により「幸道上座」は出現したのでありますから。

曹洞宗で馴染の深い洞山大師の「宝鏡三昧」のお経の最後は、「たゞ能く相続するを主中の主と名づく。」とあります。何をどのように相続するのでしょうか。前の二句は、「潜行密用は、愚の如く魯の如し」と。

俗が考えている財産を継ぐ事や、跡目を継ぐといった相続とは少しく違い、仏道の相続は別な次元、「行」そのもの相続。伝える人、受ける人、伝えること（＝仏道の実践）が日々の行持の不断の処にあるというのでありましょう。

幸道上座には、高祖様膝下の永平寺で大業成就への第一歩を踏み出されます。大衆と動静一如、乳と水の如く和して修行が円成されることを切にお祈りする次第です。

伊藤幸道さんの幸せな道

柏市　杉浦　宏済

「えっ!?」昨年一〇月、月例参禅会の茶話会のとき、部屋中が息を呑みました。全会友さんの目が、椎名老師と伊藤さんに釘付けとなりました。

それは、椎名老師より「このたび、伊藤さんは、彼の固い決意によりまして、出家することになりました。つきましては一二月八日の成道会の後に、出家得度式を行ないます」とのお言葉があったからであります。

一昨年の一二月、伊藤さんや他の会友さん達と共に私もそれなりの覚悟をして在家得度を受けさせていただきましたが、椎名老師のお言葉をお聞きして、最初の思いはまさに「在家得度をさせていただいてからまだ一年もたっていないのに、なぜ?」「えっ?!」だったのです。しかし、すぐに「やはり!」という思いにとって変わりました。

礼讃文に聞き入る伊藤さん

その一つの要因は、伊藤さんが一昨年二月に、初めて龍泉院参禅会に出席されたときの第一印象が思い起こされたからです。そのときの伊藤さんは、交通事故に遭ってから命について心底から考えるようになり、それが仏縁を得る契機となったこと。また先祖のお陰様で龍泉院参禅会に縁を得られ大変感謝していると話されました。「若いのにしっかりした求道心をもっている方」というのが、そのときの印象でした。

他の要因は、心から尊敬申し上げている椎名老師の素晴らしいご指導力によって、いつかこの参禅会会友の中から、赤心の出家希望者が出現するかも知れないという思いを密かにもっていたことです。その二つの思いが相乗して「やはり!」となったのです。

成道会の前日、龍泉院様にお役を与えられた会友さんが集まり、出家得度式のリハーサルを椎名老師のご指導の許に行われました。そのときの伊藤さんは、五体投地すらままならぬ風に見受けられました。私は、出家得度式における伊藤さんの介添役を賜りました。

伊藤さんにとっても、私たちに

とっても、実に大切な儀式であります。些かも粗相があってはならないとの思いから、家に帰ってからも、儀式の流れ、その時その時にすべきことを念入りにチェックし、頭に刻み込んで、遺漏のない介添をすべく当日に臨みました。

しかし、そのすべては徒労に帰しました。伊藤さんは、前夜、私の何倍もの努力をされ、すべてを見事にやり遂げられました。また儀式最後の挨拶「あれこれ考えないで、自分を永平寺様に投げ入れ、あとはすべてお任せです」も実に素晴らしいものでした。

これらの見事さは、伊藤さんの出家の決意が、一点の曇りもないことの証であります。

清濁併せ呑む修羅世界を泳いで糊口をしのぐことに汲々としている私にとって、その出来事は少なからず衝撃でありました。自己の求道心の貧弱さを自戒せずにはいられませんでした。

伊藤さんが椎名老師から賜りました安名「幸道」は、伊藤さんの母上様の実家屋号「幸右衛門」と伊藤幸一さんの名に由来するとのことです。

よきご先祖、よき師匠の椎名老師のお徳を頂き、また龍泉院参禅会会友の激励を背にして、伊藤さんは、いよいよ三月下旬、永平寺様に上山されます。修行のあかつきには、多くの人々を善導の上、幸せな道を歩んでいただき、それを自己の幸せの道として欲しいものと、勝手ながら願っております。私も鈍足ながら、伊藤さんの向かった方向を見失わないで、歩み続ける覚悟であります。　三拝九拝

信じる道、ひたすらに

柏市　武田　博志

参禅会で赦されている唯一の酒宴が新年会である。今年は昨年の成道会で出家得度された伊藤幸道さんの激励会を兼ねていた。

伊藤さんは当参禅会はじめての出家者であるので、出家得度の儀式など会としての関わりは初めてのことばかりであった。古参、新参を問わず多くの参禅会員が、伊藤さんの出家の場に立ち会った。

血脈を授与される

春になれば、永平寺へ修行に赴く。永平寺は山深く、上山する頃はまだ雪が残り、林間を寒風が吹いていることだろう。

そこへ、寺の後継ぎでもなく、一九、二十歳の若者でもない伊藤さんが一人で門前に立ち入門を請うのだ。その後ろ姿を想う。幾多の試練が待ち構えていることだろう。辛い事があった時、出家得度に立ち会った道友の顔を思い浮かべて欲しい。くじけないで欲しい。

新年会の席上、伊藤さんの意気込みを聞いた。そこで耳にしたのは、坊さんや仏教学者が口にしたこともない内容だった。修行道場が若い女性のために開かれ、仏教の教えに従う生き方をして欲しいという。

子供を育てられない若い母親の増加、騒音に満ちたパチンコ店内でタバコをくわえ、幼子を膝に乗せている姿を思い出した。こどもを無視する結果、表情もなく感情を表さないネグレクトの増加。ストレスの発散の対象で、怯えて親を見ようとしないあざだらけのこども。

伊藤さんの話で思い浮かんだのが、そうした若い母と子の姿だった。自由をはきちがえた勝手気ままな生活の結果は本人だけに留まらない。子を持てば子にまで波及する。集団生活のルールさえ無視して生きられる現代の日本。暴力を恐れ、助言する者も指導する者もいない。仏教によって、こうした人たちを導きたいと考えている伊藤さんに光明をみる思いだ。

思い起こせば、数年前、参禅会に入ってきた若者の言動は、ここに至るまで、ひとつとて不自然なものはない。大きな交通事故をきっかけに仏教にめざめ、一日一日それを深めていった伊藤さん。あたかも敷かれたレールが目前に用意されていたかのようだ。

持ち前の正直さ、衆生を救おうとする者にお釈迦様は大いなる力を与えると、私は信じて止まない。ひたすら信じる道を歩んでいって欲しい。

真っ白な心で

鎌ケ谷市　伊藤　幸道

平成一四年一二月八日、御老師様、参禅会の皆様、そして私の両親、親族のご理解、お力添えのもと、出家得度をさせていただき、

本当に有難うございました。
得度の時、謝辞の中で触れなかったのですが、得度と同時に私に力強い味方が舞い降りてきました。それは平成一二年一二月にこの世を去った祖父、飯野幸作なのです。私がいただいた安名、幸道は祖父幸作の戒名、法雲幸道居士の幸道と同じなのです。私はこのとき驚きと同時に仏の魂の偉大さ、不思議さというものをしみじみと感じました。
その日から、約二ケ月が過ぎました。徐々に上山の日が近づいてくるにしたがい、永平寺で修行する大きな目標に向って、思いは強くなり、小さな事へのこだわりが、段々と薄れてきました。
私はもともと不器用なほうで、俗世間にどっぷり浸かったサラリーマンの出身です。同期で入山するお寺出身の雲水さんと違って、慣れるまで時間が掛かりそうです。しかし、ほんとうの仏の道、仏の心とは俗世間でいろいろな思いを経験してこそ理解し学ぶことが出来ると思っています。私が今まで経験した思いは、体で学んでおります。頭で考えなくとも、自然と体が動いてくれると思います。
永平寺様では、道元禅師様の仏の道を真っ白な心で一つ一つしっかりと体で学びたいと思います。そして、道元禅師様のご尊前、ご本尊様の前にしっかりと正座をし、しっかりと手を合わせ、禅師様、ご本尊様にしっかりと向き合いたいと思っています。

坊主頭が似合っていると、お母様

会社人から社会人へ

柏市　五十嵐嗣郎

サラリーマン社会では会社の目上の人、特に社長や役員、上司の部課長などに対しては、丁寧に挨拶をするし、挨拶をされた方は威厳を保つためか、鷹揚な態度でこれに応える場合が多い。また、役員や上司の意見や話しには調子をあわせて、気に入られようとする人が多いのではないでしょうか。その結果、役員や部長などは、自分には人徳があり能力も高いように、つい錯覚してしまうのです。
ところが、役員の任期を終え取締役のボードから外れた途端、周りの人は無視とまでは言わないが、さほど敬意を払わなくなります。また、部長達も役職定年などで役職を離れた途端、かっての部下からは挨拶されなくなるケースは、どこの会社でも見られることではないでしょうか。
要は、部下は肩書きに対して頭を下げていただけで、その人の本当の能力や人徳に対して敬意を払っていたのではないのです。
『正法眼蔵随聞記』にも次のようなお話が書かれています。ある時、宇治の関白殿が見苦しい衣服を着て、湯殿の火を焚いている所を見に来た時、湯殿の役人に「何者ぞ左右無く御所の鼎殿へ入るは」と言われて追い出されました。そこで関白殿は急いで立派な装束をつけ、厳かに、いかめしく出直すと、先の役人は遥かにその姿を見て、恐れ入り逃げてしまったのです。関白殿下はその後、装束を竿に掛け、恭しくこれに拝せられたので、そばにいた人が不思議に思い問うた所、「我、人に貴びらるるも、我が徳に非ず。只、この装束の故也」と答えられたのです。
このように我々は日ごろ、肩書きや見かけで人から評価されたり、対応されているのです。私は一年後には会社を離れますが、何の肩書きも無くなった時こそ、本当の評価が与えられるものと思うと、正直不安が無いとは言えません。
では、肩書きによらず、真に正しく生きて行くにはどうすればよいのでしょうか。その答えは随聞記に次のように示されています。
「古人云『言満天下無口過、行満天下忘怨悪』是則言ふべき処を言、行ふべき処を行ふ故也。至極要道の行也。」
即ち、よく考えて正しいと思うことをはっきりと言い、正しいと思うことを行う事です。しかし、これが生身の人間としてはなかなか難しく、言うは易く行うは難しなのです。
でも、少しでもこのような気持ちで、行動できるように心掛ける事により、肩書きに頼らず、人徳で評価されるようになりたいものです。果たして定年を迎える時までに、そのような人徳が身につくかは、これからの努力次第だと自覚しています。要は実行あるのみです。

心の置き所・拠り所

沼南町　松井　隆

坐禅を始めて早いもので十年位になろうかと思いますが、会社を退く節目のせいか、また暇があり過ぎるせいか、どうでもいい事をあれやこれや考えることが多くなったように思えてなりません。このようなことを記すのもその一つと言ってよいでしょう。

まだ心の置き所が定まらず、心の拠り所が分からない、迷いの人生を歩いていると、皆さんはお思いになるでしょう。

坐禅では心の置き所を、掌に置くのが良いようにお聞きしました。

私の体験では、一メートル程先に目印を選び、時には数息観を行うなどして心を集中させることができます。掌に置く心はどうも手の温もりによって、心がどこかへ行き、眠気や妄想が浮かんでくることが多いように思いますが、皆様は如何ですか。心は掴み所のないものであり、他人の立ち入りを許さず、自らがしっかりコントロールするもののようであります。そして、心が彷徨って定まらない状態では、為す術も定まらず、目標にはなかなか達することができません。心が良い状態にあるとは言えないようであります。

会社勤めでは、心があまりにも会社に集中しすぎて、会社人間になり、いろいろ世間に迷惑を掛けてしまうように思います。

最近、狂牛病に始まる食品問題、また、企業、役所、警察から病院までもが「信頼を反故にする」とした出来事が続出しています。これらの組織にあっては、その指導者が「信頼が最大の利益なり」という、心の拠り所を忘れてしまい、いろいろな不祥事を次々と引き起こしているように思えてなりません。

改めて、心の置き所・心の拠り所の重要さについて考えさせられます。私も企業の真似事を始めて二年になろうとしていますが、心の置き所・拠り所を正して研鑽に励みたいと思います。

龍泉院参禅会の弛まぬ前進と、椎名ご老師の心篤いお導きを通して、安心のお布施を少しでもできるようにと念じております。合掌

重い決断

柏市　加藤　孝

それは重く、厳しく、哀しい決断であった。

私の長兄（八六歳）は数年前に痴呆症に罹り、後継ぎの甥（彼の妻は重度の腎臓障害のため人工透析を週三回行っている）が面倒を見ていたが、二年前に家庭での治療には限界があることから、老人専門病院に入院させた。

昨年一〇月に容態が悪化し、殆ど意識が戻らず点滴だけで命を保つ状態となり、私が見舞に行っても反応は無かった。そして今年の正月明け早々に主治医から現在の治療では長くても二ケ月の命だが、より濃厚な治療をすれば幾ばくかの延命は可能だろう、ただし意識の回復は百パーセント望めないだろうが、家族としてはどの治療を希望するかと聞かれたという。

そして甥は数日思い悩んで私に相談してきた。その結論は「敢えて延命治療はしない」という事であった。

私の考えも彼と一致したため、主治医に伝えその通りの治療が行われ、兄の命は医師の予測どおり約二ケ月もち、一月三一日に亡くなった。

重い決断の意味は、延命治療をしないが故に他の治療と比較すれば、兄の命を縮めることであり、死を早める事を肉親として果して如何なるものかという事である。「命は地球よりも重い」という陳腐な格言を引き合いに出すまでもなく、命はかけがえもなく重い。その命を左右するのであるから決断にあたり、逡巡するのは当然である。

甥から相談を受けた時、私が彼にアドバイスした事は以下のような事である。

・父が元気な頃、人生について色々と語り合っていたか？

・人間の尊厳とはどの様なことか？ただ呼吸をし、心臓が動いているだけが人間か？

・君が父の立場ならば現状をどの様に受け止めるか？自分ならば生き延びたいとは思わない。

・父の発病以後、君は十二分に介護したという自信があるか、悔いは残らないか？そして父に意識があればその事に対し、父は感謝の言葉を返してくれると思うか？

・最終決断をする前には少なくと

も兄弟の合意をとること。そして複数の兄弟が医師と話し合う事が大切だ。必ず兄弟を同席させよ。

・ひとたび濃厚治療を始めれば、医師の責務として中断することはないと言われる。その行為は殺人に相当するとも言われている。その治療による長期にわたる諸々の負担の覚悟があるか？

・父の兄弟への説明は自分がするから安心しなさい。

・兄貴は帝国海軍の軍人だった。多くの戦友を葬送したに違いない。戦死した友人と比較すれば充分すぎる余生を戴いたという気分があろう。生ける屍となる事を恥じないだろうか？

・充分生きて戴いた。もう良いではないか…

そして私の兄は一月三一日午後七時二〇分、今は亡き妻のもとへ逝ってしまった。告別式には軍歌「海行かば」の歌に送られて……。

今回学んだ事は、自分の死をどのように迎えるかは神仏しか知らないが、自分自身の終末期の在り様は妻や息子達と話し合い、生前から意思をはっきりと文書に記しておく必要があることだ。そうすれば残された者が幾日も悩む事なく医師と相談出来るし、自分の意思どおりに人生を終える事が出来るだろう。

私は今、その作業にとり掛かったところである。また、悔い無き人生を送れるよう更に仏道修行に励まなければならないと、心新たに誓った次第である。

〈追記〉長姉（八四歳）は一月三〇日に亡くなった。彼女は一五年前に脳卒中で入院し、五年間、植物人間状態であった。

私達親族にとって、今年は何という年であろうか。あらためて健康である事の有難さを痛感しているところである。

龍泉院参禅会簡介

一、**日　時**　毎月第四日曜九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）四月は八時半より坐禅作法指導

一、**坐　禅**　第一炷　口宣、坐禅三〇分
経　行　一〇分
第二炷　坐禅三〇分

一、**講　義**　木版三通、開経偈を唱えて、椎名宏雄老師より『**正法眼蔵**』の提唱を聞く。昨年より「行持」下巻

一、**座　談**　自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散

一、**参加資格**　年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます

一、**会　費**　無料

一、**成道会坐禅**　月例参禅会の外に、毎年一二月の第一あるいは第二日曜（本年は一二月七日）釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要後、法話を聴聞、点心を共にする

一、**一泊参禅会**　六月七・八日、七炷の坐禅をし、ご提唱を聞く

沼南雑記

参禅会記録、（　）内は座談司会者

平成一四年

●一〇月二七日　三〇名
（美川武弘氏）

●一一月二四日　三六名
（寺田哲朗氏）

●一二月八日
第二〇回成道会　三八名
導　師　椎名宏雄老師
総幹事　小畑節朗氏
出家得度式　五八名
戒　師　椎名宏雄老師
発心者　伊藤幸一氏

●一二月二二日　二八名
（三町勲氏）
禅講の後、龍泉院スス払い

平成一五年

●一月二六日　二八名
（添田昌弘氏）

●二月九日
新年会　二二名　於・木曽路

●二月二三日　二九名
（小畑節朗氏）

▼昨年の年番幹事添田・松井両氏御苦労様でした。お陰様で出家得度式等数々の行事を無事円成することができました。今年は中嶌・永野両氏が担当致します。宜しくお願い致します。

▼当参禅会史上初、会員の出家得度式が行われました。出家者を向こうの世界と見ていた時、老師からの「皆様も当事者です」との一声に身が引きしまりました。そして嬉しさが込み上げてきました。

▼恒例となりました新年会、二月九日、「木曽路」にて開催。老師からは湯のみのプレゼント、当たりの松井・徳井さん大喜び。お湯を入れると、湯のみの文字が消えて七福神が現われました。大歓声。
（宗房）

●発　行／天徳山龍泉院　千葉県沼南町泉81　☎(04)7191160 9
●印　刷／岡田印刷株式会社　柏市高田1116－45　☎(04)7143131